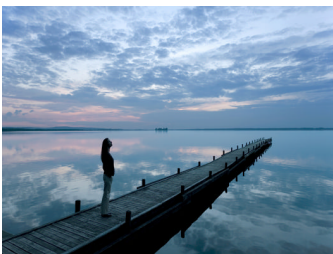


# ある男の軌跡

## 牧草 泉



男は目を覚ました。太陽は既に南中に近かった。テレビをつけた。すでに十一時を過ぎている。「昨夜が少し遅かったからな」と独り呟いた。朝飯とも昼飯ともつかない食事をして家を出た。昼時のアパートの広場では犬が腹をすかしたのか、植木を盛んにあさっていた。男に気づくと慌てて走り去った。犬があさっていたところにスナック菓子の空き袋が見えた。にんにくの臭いが少しした。

男の行く先は決まっていた。今日は競馬の中日だった。しかし競馬の中日などは男にとってどうでもいいことだった。競馬が開催されていればよかったのだ。競馬場に行くのは時間潰しのためだった。

朝は夜になればいいと思った。夜になると朝が来れば何とかなるだろうと思った。しかし生活に変化はなかった。時間だけが起伏もなく流れていた。男はいつかこの生活から脱出しなければならぬと思っていた。周囲に空間はあった。手を伸ばせば思いつきり伸ばすことができた。走ればどこまでも走ることができた。遠くも見渡すことができた。

女にも時間だけが流れていた。男にはそう思われた。

女と知り合ったのはバス停留所だった。その夜は雨が降っていた。車が盛んに飛沫を飛ばしていく。その度に男は傘で防いだ。それでも体は雨に濡れた。そこに女が来たのだった。女は傘を持っていなかった。すでにかなり濡れていた。近くの家から出てきたのではないことが一目で分かった。

男は傘を女にさしかけた。女は驚いたように男を見た。目許の美しい女だった。少し迷惑そうな表情が顔に浮かんだ。男は自分の善意がおせっかいだったことを知った。しかし男は傘を女にさしかけたままだった。女が避ければ、それ以上の善意を押しつけるつもりはなかった。女は男から自由だった。しかし女は逃げなかった。男の傘の中で雨脚をしのいだ。

バスが来た。男は女と一緒に乗りこんだ。男が先に座った。男は自分の務めは果たしたと思ったのだ。席はかなり空いていた。女は男の傍に座った。意外だった。女は他の席に座るものと思っていた。男は傘をさし掛けてやった時の迷惑そうな女の表情を思い浮かべた。女は男をチラッと見ると軽く頭を下げた。男は傘をさしかけてやったことへのお礼だろうと思った。雨は激しく振っていた。バスの屋根を叩く雨音がエンジンの音を消し去っていた。

た。それでも男は狭い空間に閉じ込められているような、圧迫感をいつも感じていた。透明な棺を頭から被せられた自分を想像した。女のせいかもしれないと思った。

でも、女は男の生活になにも干渉しなかった。朝と夜の食事を作ってくれた。毎日万札を食卓においてくれた。それだけだった。物理的な強制は何もなかった。言葉の強制もなかった。男はそれが苦痛になってきていた。

万札が毎朝食卓に置かれている。初めは気持ちが悪かった。こんな女がいるのだろうか、そう思った。しかし金は、あればありがたかった。だからポケットに入れて競馬場に行った。それほど女が高給取とは思えなかった。かなりな負担だろうと思った。ためていた貯金を取り崩しているのだらうと想像した。しかし相手がくれるのだ、何も強制しているわけではない。そう思うと気が楽になった。反応は女の方からあるだろう。その時はその時だ。この状態がある期間は連続するにちがいない。今男には精神的負担はない。しかししる次第に負担になってくるだろう。それはわかっていた。しかしその時取るべき行動は男自身にも予想がつかなかった。そのときになって考えればいいと思った。

女はどこに勤めているかも言わなかった。男も聞かなかった。しかし男はある程度推測できた。しかし口には出さなかった。聞けば女の衣服を剥ぐような気がしたからだ。

バス停が近づいてくると、男は女に「下りますから」と言って立ち上がった。女はそれに気がつくくと、「私も下ります」と小さな声で言った。バスが止まった。女は雨の中に下りた。男は下りると女に傘をさしかけた。女は逆らわなかった。女が歩いていく、男は追いかけるように歩いた。傘が時々女に遅れた。その度に女の肩が雨に濡れた。その雨で女のピンクの上着が雨に染みだした。そうしてベージュに変わった。

女はビルの前で立ち止まった。「ありがとうございます」女は顔を少し上げて言った。女は足早にビルの方に駆けて行く。男はその後姿を眺めていた。細い足が時々コスモスの茎のように見えた。細い茎の先端に真っ赤な花がゆれていた。その後姿を街灯がぼんやり照らし出した。男はファッション・ショーのモデルを思い浮かべていた。女が突然振り返った。男は慌てて顔をそらした。男は逆の方向に歩き始めた。男は女の視線を背中に痛いほど感じていた。雨脚がひどくなった。

二度目に女にあったのは昼食時だった。男がレストランに入ると目の前に女が座っていた。和食を食べていた。女が目を上げて男を見た。女は男に気がつくくと立ち上がって、「この前はありますがどうございました」と言っただけで下りた。男は軽く頭を下げた。男は女に向

チンコは時間つぶしには最適の遊びだった。しかし時間と万札の消失は完全に比例していた。その夜も二万ほどずつていた。預金通帳の残高欄がふと目に浮かんだ。

女が突然話しかけてきた。男ははっと我に帰った。顔を挙げるとそこに女の顔があった。少しはに自分でいるように見えた。女はもう一度言った。「今度の日曜日お忙しい？」はつきり聞こえた。女の顔が大きく見えた。女の食べのこした刺身が目にはいった。醤油に浸ってヒルのように見えた。ヒルを思い出したから食べ残したのだろうと思った。女はドライブをしたいと言った。男は拒絶しなかった。「車は私が用意します」女は独り言のように言った。

女の運転は慣れていて、男は弁当をコンビニで二つ買って持ってきていた。ひとつは女の方だった。女は「そんなことはなくてもよかったのに」と言った。女は弁当を作ってきていた。「自分で作ったのよ」と言っただけで笑った。車はレンタルだった。ドアに会社名が張りつけてあった。

坂を上り詰めるとそこに大きなダムが見えた。みんなみんなの鳴き声が聞こえてきた。女は無表情に運転を続けた。男も黙って景色を眺めていた。でも、男に気詰まりはなかった。女も同じだろうと思った。女の横顔にはあの雨夜の迷惑そうな表情はなかった。どこを走っているのか男には

かかって「ここ空いてますか？」と訊ねた。女は軽く頷いた。男は女の前の席に座った。女は尋ねた。「お勤めは近くですか？」。男はいまいちに返事をした。男の顔に動揺が現れていた。

男は無職だった。つい最近まで、中堅のデイスカウント・ストアに勤めていた。店長を任されていた。従業員は三十人いた。その従業員もほとんどが女性のパートだった。正社員は五人しかいなかった。男は使い込みをしていた。些細な額だったが、会社の臨時監査でばれた。補填はしていたが、貸借対照表の項目で不正がばれた。弁解の余地はなかった。会社から退職勧奨を受けた。男はすぐに辞表を書いた。

男が辞めても、店は困ることはない。男はその他大勢でしかなかった。店長候補は会社のどこにもたくさんいた。店長の職は特別な技能とか技術は必要ではなかった。経営方針の決定権は現場には全くなかった。指令どおりに動けばそれで足りた。会社の上部に経営対策室があった。ここから指令が出た。店長が口出しできるのは、売れ残り商品の処理程度だった。男の存在は店にとって必要条件ではなかったのだ。

職を失うと時間が負いかけてきた。逃げてでも逃げてでも、逃げ切れなかった。男はパチンコにおぼれた。男が雨降りの夜に女に出会ったのはパチンコをしての帰りだった。パチンコは分らなかった。同じ所を回っているように錯覚した。しかし窓の景色はみな違っていた。女は何回もここに来たことがある様子だった。

女は車を止めた。「お昼にするわ」女は独り言のように言った。道の脇に小さなベンチがあった。女が弁当を差し出した。巻き寿司が三本きれいに並んでいた。隣のベンチには若い男と女が座っている。楽しそうに話していた。時々笑い声が聞こえた。せみの鳴き声が小さく聞こえた。その鳴き声は二人連れの笑い声でときどき途切れた。女は前にある池の水面を見つめていた。「何を見ているのだろうか？」。しかしその焦点は分らなかった。別に関係ないことだと男は思った。

男が女のアパートに駆け込んだのはそれからまもなくしてからだ。女とスナックに行ったとき、別れ際に女が言った。「うちにきてもいいわよ」。あなたのことは何もかも知っているという表情だった。男はたじろいだ。予想外の言葉だったからだ。しかし女の言に従った。持ち金が底をついていた。今月のアパートの家賃を払えば完全に借金。結局男は女のアパートに転がり込んだ。女のアパートは男のアパートからそれほど離れてはいなかった。女は拒否しなかった。女は男の首に手を回した、温かい腕の感触が男のほほを刺激した。女の体はやわらかかった。

美しい体だった。女は燃えた。女は燃え尽きた後言った。「あなたはあなた、私は私よ、いい？」

女は男の顔を見上げて言った。男はそのときそれほど、その意味を理解していなかった。それぞれ自由に生きればいいのだと思っていた。そのようなお互いの生き方が負担になるだろうとは思っていなかった。

転がり込んだ翌日から食台には万札が置かれていた。男はふと戸惑いを感じた。使っていていいということなのか？ それ以外に考えようがなかった。一日目は恐る恐る使った。女が何か言ったら返せばいいと思った。その夜、男は女を抱きながら尋ねた。女は言った

「仕事ないんですよ？ 使っていていいわよ」

毎朝それは欠けることがなかった。男はその万札を持って家を出た。

「これでしばらくは働かなくてもいい」男は思った。男には仕事をしようという意欲はまだなかった。夜は遅く帰った。女と顔を合わせるのが億劫だったからだ。金をもらっているという負い目もあった。いやそれが大きな原因かもしれない。しかし男にとって時間が静かに流れることは、必要条件だった。でもなぜ必要条件なのか分からなかった。

男は競馬場を出ると行き付けのスナックに立ち寄った。西日はすでに山に隠れていた。競馬場に四時間いたことになる。

ながら「意志の疎通はこれで十分なのよ」と男の顔を胸に押し付けながら言った。そのときはそれで納得した。女のふくよかな肌に心のしこりが解けていった。朝がくるとそのしこりが再び体積を増し、重くなった。その繰り返しの中で時間が過ぎていく。男は夜がくるのが待ち遠しかった。女を抱けば心の平穏が保たれる。

競馬場で知り合ったKの言葉が浮かんできた。「あなたたちの関係はいずれ終わるよ。あなたが去るか、女が去るかだな。あなたの生活は間違っている。ヒモになるなら徹底してヒモになるんだね。女を支配するんだ。そうでないと女も不幸だよ」。

人間には相性がある。Kとは馬券売り場の向かいにある、おでん屋で顔を合わせた。お互いに顔を見合わせた瞬間男はKに親近感を持った。Kもそうだった。男を見た瞬間Kの表情が穏やかになった。笑顔がこぼれた。男はKの席に引かれるように歩いていった。Kは卵を食べていた。表面がスープで茶色に変色している。Kは卵を続けて二つ食べた。Kが尋ねた

「連勝式かね？」

男はうなずいた。

「今度のレースはだめだよ。穴狙いかね？」

Kは男より年配ということを知った上で話している。言葉がぞんざいだった。男もそれは知っている。Kの髪は耳

男は、賭け事は好きだった。おそらく父親の遺伝子が入り込んだのだと男は思っていた。

父親は自衛隊に長くいた。時々家族連れで競馬場に行った。しかし父親が馬券を買うのは一レースに二、三枚だった。家族は芝生に寝転んでレースを見た。昼になると母が弁当を広げた。男は海苔巻が好きだった。母親の海苔巻は誰にも負けないと、男は誇りに思った。男にはそのころの競馬場の風景が心のどこかに残っていて時々具象化した。馬券売り場の向かいに並んだ飲食店の風景が男の脳裏にしっかりと刷り込まれていた。父は男が小学二年生のとき亡くなった。涙を流した記憶はない。そのことが男の心の傷としていつまでも残った。小さな傷ではあったが。

祖父は花札賭博が好きだった。田舎では時々花札博打があった。祖父は毎回加わっていた。叔父が時々止めるように忠告した。そのたびに祖父は生返事を繰り返し決してやめることはなかった。亡くなった父も祖父から受け継いだ遺伝子にしたがって競馬場に行っていたのだろうと思った。

女との会話は少なかった。女はそのことをそれほど気にはしていない。それは女の言動で理解できた。表情が変わらなかった。無表情というのではない。言葉遣いも時間にも起伏がなかった。

男は少し負担になり始めていた。女は男の裸の胸をなで

際のほうが少し赤茶けていた。髪は染めているのかもしれない、でも競馬に来るほどの人間に髪を染めるようなダンディさはないだろう。顔のしわも多い。四十四、五歳だろうと思った。

「そうでもないですけど」

「そうだろうな。穴狙いは身の破滅さ。そんな奴はいずれ顔を出さなくなる。すっからかんになつてね」

腕を組みながら男は言った。話が途切れた。男はKから離れた。Kは何も言わなかった。黙って立ちつづけていた。何を考えるでもなく空を眺めていた。

男はハローワークに行った。女から小遣いをもらっての毎日の生活は、初めは気楽だった。しかし、日が経つにつれて気が重くなってきた。女の万札提供がいつかは途切れるだろうと思った。女には黙って数社の入社試験を受けた。三社から合格通知が来た。一番無難だと思えた警備保障会社に就職した。出勤初日早く起きると女はいぶかしげな表情で尋ねた。

「仕事でもするの？」

男は「うん」と言っただけだった。女はそれ以上何も聞かなかった。女は弁当を作ってくれた。手馴れたものだった。臨機応変だった。おかずはありあわせの卵焼きやソーセージ、高菜漬の油いためなどだったが、結構おいしかった。

警備員の仕事は夜勤があった。二十四時間の勤務でその翌日は二十四時間休日だった。警備時間中にも仮眠時間はあった。だから時間の余裕はあった。男はそれが苦痛だった。酒を飲んで退屈さを紛らわした。定まった時間に巡回すれば、それ以外は警備の詰所にいればよかった。男には詰所にいる時間が退屈だった。この空き時間を利用して司法試験の勉強をしている警備員もいた。しかし、男にはそんな時間を追うようなことをする意欲は湧かなかった。時間が男を責めていた。男も何かしなければと思うことはあった。しかし、時間はそのままずるずると過ぎて行った。

休日は相変わらず競馬場に行った。もちろん警備会社にも勤めるようになってからはその回数は激減した。ほぼ一週間に三回ほどだろうか。もちろんKと会うことも少なくともなかった。会っても挨拶をする程度だった。別に忌避したわけではない。Kとじっくり話してみたい気持ちはあった。Kは何を生業にしているのだろうか？ 男はKの過去を知りたかった。他人の過去を知ってどうするのだ？ そんな思いが時々去来した。女との奇妙な関係についてももっと聞きたかった。そう思いながら内実はKの生き方から、男は何かを学び取りたかったのだ。

女の態度が変化し始めたのは、男が警備会社の仕事についてからまもなくしてのことだった。本当は仕事について

ながら、そのことがなぜ女を去らせる原因、理由になったのか分からなかった。経済的には女は楽になったはずだ。もともと男が就職したから万札を止めたわけではない。でも男の金銭的ゆとりは以前よりできたはずだ。男の金銭的ゆとりが女を不安にさせたのか？ それは男には理解できないことだった。女の書置きが食台にあった。

「あなたには悪いと思うけど、私は出て行くわ。あなたに存在価値が認められなくなつたからなの。私のためにあなたには必要だった。そう、あなたと会つたその時の、あなたが必要だった。ところがあなたは私と同棲するようになって少しずつ変わって行った。どう変わったかといつても、はっきりとは答えられないけれど、あなたは私の生理的一部分から分裂して距離を置くようになった。細胞分裂して離れて行くヒドラ幼生のように。あなたに好意を持ったことは間違いないの。セックスも満足していたわ。しかしあなたは自立の道を歩み始めた。」

あなたは私の一部であつて、それで初めて私にとっては価値がある人間だった。私は所有権が絶対的でなければ気が済まなかったの。条件がついている、或いは期限付きの所有権には興味がなかった。つまり無担保のあなたが必要だったの。あなたが私と対等になれば、そこには所有する者と所有される者との関係は終了する。そんなあなたには興味がない。私にとってはわざわざらしい存在でしかないの。

ときからかもしれない。男が、気がつかなかっただけなのかもしれない。具体的にどう変わったかと聞かれても男は説明できなかった。万札はいつものように食卓に置かれていたし、女が交わりを拒否したわけでもない。いつものとおり、二人でつかの間の間の快樂におぼれた。

女の視線が変化したのでもない。必要なときは、女は男を真正面に見据えた。それでも男には女の変化を感じ取ることができた。男はその変化の原因を考えた。男が変わつたのは仕事を始めたことだ。それに伴って競馬場がよいが減つたことだ。この二つの一つか、あるいは両者が原因であることは間違いなかった。男は女に暴力を振るつたこととはない。競馬場に行く回数が減つたことが女に不利益を与えたとは思わない。物理的には変化しても女の精神面に不利益を与えることになるとは思えなかった。だとすれば女が変わつた原因は男の就職だ。男は自分が就職したことで女に不利益を与えることがあるのか再三考えた。しかし分からなかった。

女は去つた。男が夜警を明けて帰つてくると女はいなかった。部屋がいつもよりきちんと片付けられていた。予想できたことだった。男にそれほどの驚きはなかった。内々漠然とだが、覚悟ができていたと思う。

きっかけが、男が仕事を始めたことであることを理解し

私は一人で生きていくわ」

男は、また独り身になった。別に不便はなかった。炊事も経験していたし、洗濯も不便はなかった。しかし、夜の独り身はさびしかった。女の肌を思い出して自慰をした。女と暮らす前は、ボルノ雑誌のモデルと交合する自分を出しながら自慰をした。

時々、ソーブランドに行った。三十代と見える相手の女は言った。

「あなたって、ロボットだね」

「ロボットって、どういうこと？」

男は尋ねる。

「それって機械人間だつてことなの」

「機械人間？」

「そうよ、何の意思も伝わってこないよ」

「それは当たり前だろう、一見の客でしかないから」  
「それはそうだけど、でも変だよ。あなたただだよ、変な人って。みんなどんな男でも、優しさとか悲しさが宿っているよ」

でも、と男は思う。あの女は俺を迎え入れた。ある期間一緒に暮らした。俺はあの女のおめがねに合ったのだ。そうしてまた思う、女は去っていったと。やはり、おれはロボットでしかなかったのか。

警備員の仕事の持ち場は時々変わる。一定の場所での仕事は少ない。会社の夜警であったり、道路工事の交通整理であったり、駐車場の管理であったりする。この持ち場の変遷が男の心を不安にした。環境の変化が原因だ、と男は思った。自分の占有する空間がない。それ以上は分からなかった。

ビルの建物を巡回しながら、「俺は今何をしているんだ？」という疑問が浮かんで来た。「なぜ俺は今交通整理をしているんだ？」。タクシーの運転手から「信号が間違っているよ。しっかりしてくれよ」と注意されたとき、男はそう思った。「俺は必死で運転してるんだ。もつとスムーズに合図しろ」とトラックの運転手が男に向かって怒鳴る。男は深く頭を下げる。頭を下げることで、これが生きる方法として最善の策だと確信している、そんな頭の下げ方だった。でもこれでいいのか？ 男はKの話の思い浮かべる。

「あんたのような生き方も悪くはないんだよ。ベクトルにできなければね、つまり分子運動以外にないんだ。昔、親父から聞いたんだけどね、東大の全学連のリーダーをしてたSという医学部生がだね、自分の生き方を模索して、長いことドヤ街に住み着いて日雇いの仕事をしていたそうだよ。結末は知らないがね。おそらく自分の生きる道を見つけて歩き去ったんだと思うよ。だから、あんたもいつかは今の生活をおさらばするときにくるんだよ」

なった。でも、慣れてくるとその不安も消えた。同棲するようになって運動エネルギーが負の加速度により位置エネルギーを得て、女が去ると同時に位置エネルギーは再び運動エネルギーに変じたに過ぎない。男はそう思った。でも外部から力が加わったことは確かだ。速度が変わり、向きが変わったのだから。この変化が男に何らかの刺激を与えたことは確かだった。

男は自炊をしながら、いつまでこんなことをするのか？ という不安が去らない。コンビニで弁当を買うときも、同じ思いに駆られた。

男は警備会社を退職した。理由はと問われると、何も答えは出てこない。自分でもなぜだろうと思う。その不安は会社を辞めたらかと行って消え去りはしない。でも、その不安から生じる苛立ちが消えている。

貯金通帳の額は少ない。失業保険で食いつないでも、あと半年だろう。でも考えようだ。後半年ある。その間にどうにかなるだろう。男は考える。でも生活保護を受けることはしたくない。それくらいなら死んだ方がましだ。男はもう一度このことを心で確認した。

競馬場に行った。最近ほとんど行っていない。久しぶりの競馬場だった。レースの中休みにトイレに行ったら、後ろからぽんと肩をたたかれた。Kだった。覗くようにして男を見ると彼は言った。

そうだ、俺の生き方もいつかは乱雑さの中からベクトルへと変わる、もう少しこのまま生きてみよう。男はほっと表情を和らげる。でも不安が消えてしまうことにはならない。Sは飛びぬけての秀才だ。苦悩も俺とは次元が違う。男は思う、「田舎ではまずまずの大学は出たが、政治運動をしたわけでもなく、ヘーゲルに親しんだわけでもなく、『世界史概説』を読んで感動したに過ぎない。当時学生運動はほとんど衰微していて、それ以上踏み込むことはなく傍観者として生きてきたにすぎない」Kの話が遠いおとぎの国の物語のように聞こえた。

男の頭の片隅にしまいこんでいた女の面影が次第に薄れていく。男は何か書いてあった一節を思い出す。「時間は全てを押し流していく。だから人生は平等なのです。男はほっとする。そうだ時間は平等なのだ、誰も逆らうことができない。

男はアパートに帰るとシャワーを浴びた。頭から水を浴びながら、男はほっとため息をつく。今日は十時過ぎに仕事を終えた。途中で食料品店に立ち寄る。男は夕食に弁当を買った。売れ残りだから、半額のラベルが貼り付けられている。ラベルは目立つようにオレンジ色である。

男は時々自炊をした。女と一緒に暮らしたときは何一つ台所の品物に手を触れたことはなかった。男にとつては原点に戻ったに過ぎないのに、炊事をするのが一時苦痛に

「おや、しばらく会わなかったけど、元気だったのか」

男は頷く。

「どこかに流れていったのかなと思ったよ」と言うと、おでん屋を指差した。

「久しぶりだ、俺がおごるよ」と言ってさっさと歩き出した。男は断ることもなく黙って後に従った。

「俺と会ってから、馬場には来なかったのかね？」

「いえ、数回来たんですけど・・・」

「じゃあ、会えなかったただけなんだな」

「警備会社に行っていたから顔を出すのが少なかったんですよ」

「彼女は元気かね？」

Kからそう言われて男はちよつとあわてた。女のことをKに言っていたことを忘れていたわけでもなかったのに。

Kはさらに言った。

「身軽になったようだな。予想通りだな」

「今は一人ですよ」男はKに釣られるように答えた。

「いずれあんたたちはそうなるとは分かっていたんだ」、とKは言った。

「女はお前さんに一夜の宿を乞うただけなんだよ」

Kは続けて言った。

「人間って生きていくと孤独を覚えるときがあるんだ。それってゆっくりと押し寄せてくることもあれば、突然襲っ

てくることもあるんだ。女は急に孤独を感じたんだろう。あるいはあなたに会った時点で閾値を越したんだろうな。そうして一緒に暮らすうちに、その孤独感が次第に癒されてきた。女は一人で歩き出すことができることを確認して、去って行ったのさ。

あなたは捨てられたと思っっているかもしれないけど、そうじゃないんだ。簡潔に言えば、あなたは初めから捨てられていたんだ。言葉は悪いけど、あなたは癒しの道具でしかなかったんだ。でも一人の女を助けたことにはなるんだよ。立ち直って去って行ったんだからね。

じゃあ、孤独の原因は何だったのか？ これは俺にもわからない。俺は第三者だから。でもあなたは思い当たることがあるかもしれないね」

Kは牛筋のおでんを頬張りながら言った。でも男はKの話を信じることはできない。いくらかは真実をかすっているかもしれない、でも違う、女は書き置きで言っている、「あなたが働き始めたからだ」と。

男は女を思い浮かべる。背丈は百六十センチくらい。男は女にいろいろ聞いてみたかった。男は他人の前歴には関心が強かった。新聞雑誌で見る筆者の略歴が書いてないと不安に駆られた。なぜ身分を隠すんだ？ 自分の意見を表白するからには、身分を明らかにすべきだ。批判され非難されるのが当然なんだ、という思いがあった。

これではいけない、正社員にならないと生活は安定しない、家庭を持ちたい。そんな思いが、女が去ってから、しだいに男の心の中を駆け巡るようになっていた。アベックが、夫婦が、仲睦まじく歩いているのを見るところやましかった。二十台にはなかつた心境だった。あの女と一緒に暮らしたことが、そういう憧れを持つ切っ掛けとなったのか、男は自問した。しかし、そうだという明快な回答は出せなかつた。

Kが言っていたことを思い出す。

「あんだね、三十を越したんだろう。結婚するんなら、早く見つけた方がいいよ。三十を越すと、性欲ががたんと落ちるんだ。性欲が減少すると、当然女への関心も薄くなる。自分でマスターベーションすればそれで済むんだよ。つまりだね、女は必要でなくなるんだ」

男は素直にKの話を聞いた。そうして今男は思う。俺は三十二歳だ、じゃあ、そろそろ性欲が下降しはじめたころだ。いや現に性欲は減退している。高校時代から大学時代にかけての、あの暴発せんばかりの性的欲望が過去のものになっている。男はふとフロイトの性感帯の定義を思い出す。「快感を生じる粘膜は全て性感帯である」男は、この説は正しいと思う。そうして美しい女を見ると全身が振るえ、稲妻のような快感が、しびれるほど四肢に奔った時代は過ぎ去ったことを確認する。

女の家族のことには関心がない。女はもう成人なのだ。

でも、生まれはどこなのか？ どの大学を卒業したのか？ 学部は何なのか？ 今まで何をしてきたのか？ 知りたかつたことは事実だった。でも女を目の前にすると何も聞けなかつた。女の雰囲気それを許さなかつた。同居していたときに勤めていた会社名も知らない。鏡台にぼつんと置かれていた電車の定期を見て、女の勤め先はF市だと知つただけだ。

しかし、と男は思う。女の体はみんな知っている。抱きしめるたびに一つ一つ確認していった。首筋に小さな黒子がある、太ももに小さな二センチほどの切り傷がある。何の傷だろうか。腹部には盲腸手術のあとが三センチほど残っている。でも、物理的な認識はしていても、心理的認識は茫漠としていた。

男はふと小さな一本道を歩いていく女の姿を思い浮かべる。周囲には誰もいない。女はやはり孤独だ。あるいはまた誰か男と同居して孤独を癒しているのか。男はぶるぶると身震いする。その感情は女に対する未練を留めていた。引きとどめればよかつたという悔いが少し残っていた。

男は派遣社員として働いた。時々自炊をし、時々コンビニの半額弁当を買った。競馬場にも時々行った。Kにもたまに顔を合わせた。やがKとは全く出会わなくなつた。

男はパチンコ店従業員、コンビニ店員、倉庫会社、焼肉店、その他いろいろな会社に派遣された。そうしてそれなりの義務を果たした。

雨が降り、炎暑に耐え、木枯らしを頬に受け、雪の中で配達車を運転し、咲き誇る梅園で梅を見た。

ある日の朝、男は眩暈を感じた。春はもう目の前だった。春の陽光が目に入ってぐるぐる回転した。眩暈はしばらく続いた。仕事を休むほどではなかつたが、力が出なかつた。やがて、物が二重に見えるようになった。今までにない症状だった。男は休みを取ると近くにあるM総合病院に行った。内科に行くと、主治医は「眼科に行ってください」と言った。眼科ではいろいろ視力検査とか、視覚検査などを受けた。そうして診察した医者は言った。「眼科としては、視力も眼圧も異常はありませんね。両目の映像にずれが見られます。脳神経外科で診察を受けてください」男は少し不安になった。

男は脳神経外科に行った。診察室に入っていくと女性の医者がカルテを書いていて。彼女の横顔をみて男は驚いた。あの女だった。あの一時同棲していた女の顔がそこにあった。同棲していたときより顔はふっくらとしていた。白衣を着ているためかやや大柄に見えた。看護師が隣に立っていた。男を見ると看護師は「どうぞ、お座りください」と

言った。男は言われたとおりに座った。女が男を見た。かすかに目の中に驚きの表情が走っただけだった。男はもつと表情が変化すると思っていた。しかしその推定が間違っていたことをすぐに悟った。女は事前に診察票を見ている。だから平然としていられたのだ。女は看護師に何か指示すると看護師は診察室を出て行った。

「今検査の準備をします」女は診察票を見ながら言った。

そうして男の顔をまじまじと見た。

「元気だった？」男は頷いた。

「迷惑かけたわね」男は首を横に振った。

「そう？ 本当？」

男はようやく声を出した。かすれ声だった。

「なんとも思っていないよ」

看護師が戻ってきた。

「先生、準備ができました」

「そう、ありがとう」

「じゃあ、今から検査しますから、MRI室に行ってください」女は看護師を目の前にして他人になった。

男は立ち上がった。上着を取ると、女の後に従った。指示されるままにベッドに横たわった。ごんごんという音が聞こえた。女は男に近づくといった。「少しやかましいかもしれないわよ、我慢してね」周囲に看護師はいなかった。男は黙ったままだった。立ち去りかけた女がまた男を振り

向いて、低い声で言った。

「私のアパートに来てもいいわよ。でも多分入院だね。手術ということになると思うわ」

女はにこつと微笑んだ。その表情は何度か見たことがあった。男は手術のことはどうでもよかった。この女との関係がどうなるのか、そればかりを考えていた。あの全学連のSもどこかで女と遭遇したのだろう。どんな女だったんだろう。男はそんなことを思っていた。「じゃあ検査を開始します」男の大きい声が騒音の中から聞こえた。寝台が静かに動き出した。男は目をつぶった。何も不安はなかった。男は女のやさしさを思い出していた。こんこんという騒音が耳に入ってきた。

(完)